



朝

開かれた朝の冷淡な舌の上に
夜闇が傾く
燐を見たカササギの子は
深く苦い光の中に 痙攣する
audivist i?
無を語るものたちの 産声を
audivist i?
腑を落とされ 抱擁を強いられた
言葉たちの ため息を
虚構の砂絵の目の下に 欲望が浮く
古のorganは
残滓である非存在を 釣る
その通り、世界には何も存在していない

開かれた朝に 楡の木が
葉裏に輝きを滑らせる
見られるのではなく
反射するのでもなく
audiebam
つまはじかれた蜥蜴の
皮膚に走る 生成の歌を
audiebam
深海魚と月光との間に
無時間な和声を
旅人の触れた塔は空を象ったもので
現象を超えて照る
あまねく知性は宿る
みなぎった悪意への威嚇
その通り、世界は自ら輝いている

開かれた朝の川床を浚って
屍に息を吹き込む
片足を失ったまま蘇った猿は
宮殿の内奥で
鮮やかに破裂していく

audivist is?

緩やかな規律の下で

流体時計のたてる 針の音を

audivist is?

専属negotiatorの

積み木細工の 衝突音を

海や波や小魚を 鑿と槌で 崩していく

崩していく間だけ 空白が占める

その通り、現象はすべて不連続である

機械

時間は円をめぐる歩行者のようで、はてのない夢境にて死を装い続ける。驟雨にぬれた林の小道で、あざやかな多面体をステッキで描く。数々の速度がきざまれた都市の舗石の上で、マッチの火をともし。視界をおおい始める煙雪に足をとめて、黄道へとぼってゆく。彼の親指の空洞には夕暮れの空がひろがっていて、ガラスでできた小部屋で少年が恋文を書いている。時間には足音がない。

ひとつの機械が彼の手のなかに目覚めている。そこから世界のあらゆる突端へと伸びるナトリウム繊維。南へと移動する硬質な空に、幾条ものみぞを彫りこむ。機械は求めているのだ、孤児のように。だがしずかに外部となった石英刃は、瞬間にひらめいて絃を截断する。にぶい金属音。降りそそぐ雨滴に呼応するかのよう、刃は絃を選別する。やがてひとつの大きな音律へと、パターンは描かれる。刃はみずから砕け散り、表皮へと突きささり、内部となる。

.....液体、だったのか。時間の手の甲にてとけゆく雪片は。赤血、だったのか。歯車のすきまを満たす重くふてぶてしい液体は。芳園、だったのか。時間の足首からにじみ出る醇美な赤血は。墓標、だったのか。機械の中心部にかたむき明滅する回路素子の芳園は.....。

剪定されたかなしみに、機械はくるおしく周波数をゆらがせる。するどい回転音。限られてしまったのだ、秋めいた孤島へと。約束の地へと飛び立つ黒鳥の群れ、大魚から逃げおおせるうつくしい熱帯魚。そして、上気する湖。機械は時間の手を離れ、大気圧を二重に迂回しながら発声をかぞえ上げる。梢をめぐる嘆きに沈み、血の温度を三度さげる。機械には比熱がない。

星々はゆがみ、海面は下降した。機械はふたたび温度を上げ、風景のそれぞれの断層から電磁波のスペクトルを呑みこむ。ウサギの目に映る数々の記録の精度。「あのウサギは動く墓標だ。うつむいた衛星が彼を射殺す前に、僕が大地へと固着させてやろう。」機械はすべての導電線を引きちぎると曇天の空へと跳びあがった――。

紫の粒子たちの間をかいくぐって、ウサギの背の上に着地する重機械。内臓のつぶれる湿った音に、マザーボードの砕けるかたい音。

錯乱した機械にはノイズがなだれ込む。それきり、機械は活動を停止した。

いつまでも、海は笑っていた。

時間の手のなかには新しい機械が、血を吸いながら胎動をはじめていた。